

熟練技術者が語る ものづくりの誇り

銭高組 井上 克三氏(55歳)

着工前の計画立案に生きがい

「高校2年生まで建築技術者になるとは考えていなかった」と語るのは、高さ150mを超える超高層マンション「ディープグラフト大阪N・YタワーHI」の井上克三作業所長(銭高組、55歳)。74年に入社した勤続33年のベテランだ。国内が列島改造に沸く中、父親の勧めもあって建築を志し、大阪工業大学工学部建築学科に進学した。

香川県丸亀市の丸亀総合会館が初めての現場。「当時は職人の気質も荒く、よく怒られたが面白かった」と振り返る。「鉄骨造りが好き」で、31歳の時には鉄鋼メーカーのスーパーバイザーとして、香港で「シテイバンクセンタービル」の建設を手がけた。

外国人の関係者が多く、「話しかけるタイミングや、自分の思いを伝えることに大変苦労した」が、仕事に対する周囲の評価は高かった。2年前に大型ショッピングセンター建設工事の作業所長として千葉に赴



いた際、偶然にも当時のメーカ担当者と再会。仕事の評判が顧客の記憶に残ると強く感じた瞬間だった。最近では、5年以上の工期をかけた大阪・中之島の国立国際美術館を担当。10万立方メートル近い掘削を行った国内唯一の地下美術館の建設工事では、美術品を傷めないためのアルカリ対策として、マスコンクリート対策と併せ、低熱セメントの採用を提案。難しい曲線部や3次元モニメントの施工もあり、「全く気が抜けない現場だった」という。頭の中で竣工までのストーリーを考える着工前の施工計画立案に技術者としての生きがいと醍醐味を感じ、「そのために多くの工法を勉強した」。それだけに、最初から最適な方法だけを教えられてきた最近の若手には「いろいろな考え方があることを知ってほしい」という気持ちがある。

建設業の発展期し 貴重な経験・技術を次世代に